

テーマ「 一致団結した教授方法 」

カテゴリー：③教育方法（授業）

1. 学校概要：学校名：播磨看護専門学校 所在地：兵庫県加東市家原 812-1 課程名：3年課程 1学年定員数：35名 修業年限：3年

【カリキュラム改正】

今回のカリキュラム改正では、専門基礎分野において人体を系統だてて理解し、観察力、判断力を強化すること、臨床判断能力の基盤となるよう演習を強化する内容であることが求められた。本校でも看護の観点から人体を系統だてて理解し、観察する能力を強化するために従来の「解剖生理学」を「看護解剖生理学」に変更した。内容を人体の構造と機能を土台にフィジカルアセスメント、形態機能学を加えた。対象を生活者としてみるために、体の仕組みを知り体の反応を観察する能力を身につけ生活にどのように影響しているのかまでを一連の流れとして学ぶように計画した。

【進度】

覚えることが多く苦手意識をもちやすい科目であるが、学内の看護教員が担当することにしたことで集中講義を実施することが可能になり1単位30時間を3～4週間での集中講義とした。人体の構造と機能を学習した後は、部位を観察する方法（フィジカルアセスメント）、そして生活行動に関連させることで一連の流れを演習も含めて進めていく。

【学生観】

学生の多くは、Z世代とよばれるデジタルネイティブな中で育った学生である。与えられたものを活用することはできるが、自分たちで考えていくことは苦手である。講義は、教えてもらうものととらえる傾向がある。通信機器も上手く操り合理的に物事を仕分けすることができる。デジタルテキストになったが、早くに慣れることができグループワークでもiPadを活用できている。

【教授方法】

担当する教員には、短い期間のなかで実施することや初めての担当領域であり教材研究が十分行えない戸惑いが生じていたが、学生の期待を一身に受け、身を奮い立たせている。教員が負担になることは予測できていたが、どのように教えると効果的か、現在の学生の特徴はどうか等、積極的に検討し学生が思考を働かせながら学習する方法を見つけようとしていた。

学生の思考は看護を考えていくには合理的過ぎる。まずは、早いうちに思考の確立を図ることが必要である。そのためには考える習慣が身につくように進めなければならない。そして、看護解剖生理学Ⅰ～Ⅴを一貫した方法で教授しようと考えた。受講しながら考え、自分で要点を見つけることができるような方法はないかと考えた。見て理解する視覚の活用、書きながら記憶を刺激するなど、五感を活用する方法が効果的ではないかということになり、パワーポイントやカラフルにまとめた資料作りは控えようということになった。基本はテキストと板書とした。人体の構造を書き、説明し、時には動画を活用し講義をおこなった。

【結果】

講義を聴きながらデジタルテキストのiPadに書き込み、ノートにまとめている様子は必死に学ぼうとする気迫を感じる。必死について行かないと板書の文字や図は消えていく。聞き逃したこと、考えているうちに過ぎて行ってしまったこと、テキストの表現と異なることなど、講義の終わりには積極的に教員に質問する姿が途絶えない。身体への反応に興味をもち、対象を生活する人として感じていく学習方法の導入は順調である。今後は、学内教員の講義は資料重視より、レジュメと板書を中心に行うよう取り組む計画である。教員間の連携が一貫したものであることが一番の強みである。